ガタガタ通信

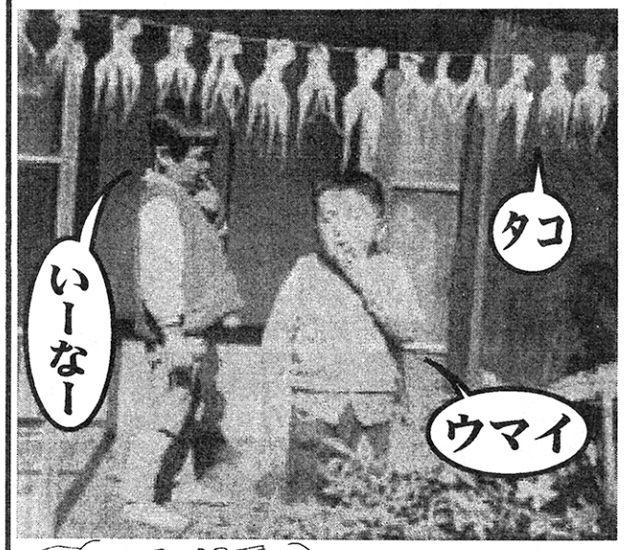
MIZUBE NI ASOBU KAI

No. 5
2001・初夏の号
発行
水辺に遊ぶ会
大分県中津市中央町2-8-35
(足利方) 0979-23-5320

むかーしむかしも、今からちょっぴりむかしも、中津に住む人々は、海と仲良しだったにちがいない。

「想い出の海の写真展」はじまりはじまりー!!

4月17日(火)～22日(日)
シーサイドギャラリー(中津市東浜)



▼日差しが水面にキラキラ輝いてウキウキワクワクの季節。中津の海は連日貝掘りの人々でにぎやかだ。▼大昔の「中津人」も、今と変わらない遠浅の海で魚や貝を捕っていたらしい。きっと今頃の季節は、海はごちそうがいっぱいの宝物のような場所だったんだろうね。そして今からほんの少し前の時代の海も、貝掘りの人々でにぎやかだった。家族みんなで海に出かける「浜遠足」って行事もどこの学校にもあったらしいよ。中津の海はいつの時代もにぎやかだった。じゃあ、今はどうだろう? 貝がいなくなったから? 海が汚くなったから? 海が汚くなったから? 他にも遊ぶところがたくさんできたから? そんな理由で海に行かないのはもったいない。まだまだ捨てたもんじゃないよ、中津の海。▼もっと海や浜を好きになって欲しいから、「中津の海」の写真展を準備中。ウウッとうなるような技巧派からウヒャヒャと笑っちゃうベストショットまで一見の価値有り。ぜひぜひ遊びに来てね。

会員募集中!
年会費1000円
事務局まで
お問い合わせ下さい。

4月8日・快晴・大新田ビーチクリーニング

お弁当のゴミ
空き缶
ペットボトル
食事したら
持ち帰ろう。

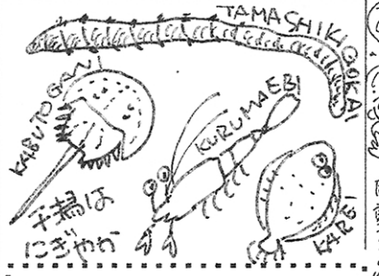
■水辺に遊ぶ会の活動報告
(2001.1.1～2001.4.10)

2001.1.20 舞手川河口生物調査
2001.1.29 舞手川河口生物調査
2001.2. 6 雑誌ＦＲＯＮＴ取材
2001.2.11 ズグロカモメと冬の鳥観察会
ゲスト：WWFJ 花輪伸一さん
2001.2.22 ＯＢＳラジオ出演
2001.2.24 アオノリ採り歌を聴く集い
協力:アオノリ採り歌保存会
2001.2.25 舞手川河口生物引っ越し
2001.2.26 舞手川河口生物引っ越し
2001.3.3～4 九州環境教育
久住ミーティング参加
2001.4. 7 干潟調査準備
2001.4.･8 大新田ビーチクリーニング
2001.4.10 干潟調査準備

★入会してくださった皆さん
イベントに参加してくださった皆さん
イベントにご協力くださった方々
カンパをいただいた方々…
心よりお礼を申し上げます。
ありがとうございました。
来年もよろしくお願いいたします。

「ガタガタ通信」次回は2001年夏発行だよ!!

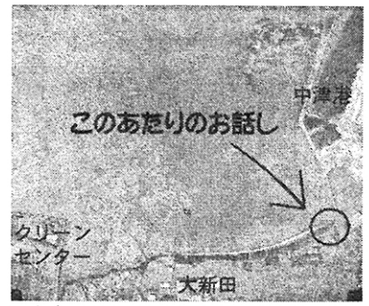
オタノシミニ
みなさんからのお便りやイラストまってます!!



〈んしゅうこうき

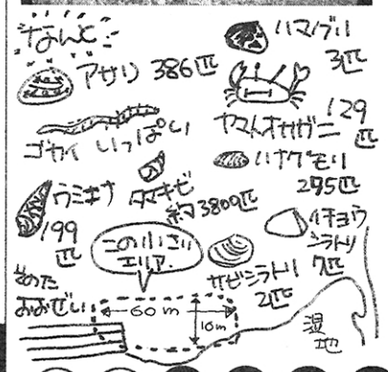
■江戸前ならぬ中津前海苔を味わうなら今です。今年の中津産海苔は最高級の出来だとか…。(あ)
■干潟でダイエット・干潟でダイエット・干潟で…呪文をつぶやきながらひたすら歩くのだ!(う)

2001年活動紹介!



舞手川河口エリアの干潟の生物お引っ越し。

大新田海岸の一番東端、「舞手川」河口エリアは中津で唯一自然海岸が残っている場所だ。でも、200メートルほどのこの海岸線の一部は、台風などの高波でどんどん浸食が進んでいる。
この土地を守るため、海岸線に沿って護岸ができる予定だったけれども、河口エリアの貴重な自然とそこでしか暮らせない生物がいることがわかったため、浸食の激しい場所60メートルだけを護岸して、残りの部分はしばらくそのまま残し、これからこの場所をどうしていこうか行政と市民で考えることになった。
60メートルの護岸ができる場所は、トロトロベトベトだけれども、当然干潟の生き物がたくさんいる。2月の終わり、舞手川河口を愛する市民有志と中津土木事務所の方々、施工業者のみなさんの手で、生きもののお引っ越し作戦が繰り広げられた。
小さな小さな場所だけれども、たくさんの生きものがいたよ。



急募 干潟調査ボランティア

水辺に遊ぶ会では2ヶ年計画で中津干潟の調査をおこないます。専門知識はいりません。一緒に楽しく活動してくださる方、興味がある方、ぜひ、ぜひ、事務局へご連絡を。

第2回大新田ビーチクリーン
6月3日(日)
正午～午後3時
大新田割荒沖福與集合
長靴・帽子持参

「センス・オブ・ワンダー」上映日程7月1日に決定!

★『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンが子どものために書いた『センス・オブ・ワンダー』の映画化が2001年完成。夏より全国で上映されます。
水辺に遊ぶ会では、「ありんこクラブ」さんと一緒にこの映画の中津での上映会を企画していますお楽しみに。

干潟観察会来てね!!
4月22日(日)

干潟を守る日 2001 参加イベント

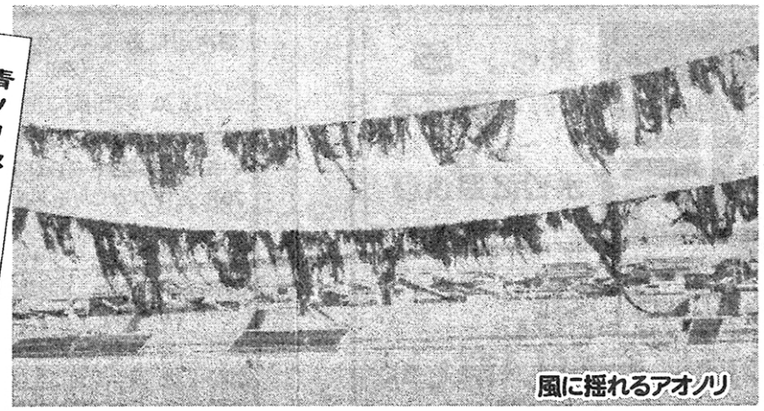
午後1時～4時
集合：喫茶シーサイド横(中津市東浜)
持ち物：長靴・タオル・バケツ・スコップ・帽子・水筒・汚れてもよい服装
参加費：大人200円 高校生以下100円
小雨決行　雨天中止
※現地にはトイレ・水道設備等がございませんのでご注意下さい。

ホームページものぞいてみてね!!

水辺に遊ぶ会はホームページを開設しています。
ご意見・ご感想など、どしどしお寄せください。
URL:http://www.yukichi.ne.jp/^ashikaga/index.htm
e-mail:ashikaga@po.yukichi.ne.jp

アオノリを知ってますか？

冬の一番寒い頃、山国川の河口近く、中津川との分岐地点あたりを眺めると、腰まで水に浸かりながらアオノリを採る漁民の姿が見られます。英彦山と耶馬渓を源とする山国川の清流と、周防灘の海水が混ざり合う河口近くには、昔から良質のアオノリの産地。師走から3月頃までの冷たい時期、川底の石に生えたアオノリは、山と海の栄養をもらって緑鮮やかに長く長く伸びるのだとか。このアオノリを摘んでよく洗い、天日で干す光景は、中津やこのあたりの冬の風物詩でしたが、最近はめっきり少なくなったと聞きます。こうしてできたアオノリは駅の土産屋さんの店先や市場で時折見かけます。口に含むと、アオノリの美しい色そのままのすがすがしい味が…。大地と水と太陽の恵みをかみしめると、自然豊かな町にくらす幸せを感じます。


風に揺れるアオノリ

自然の中で生きるということはつらくて厳しい…。でも、それだけに喜びも大きいのかもしれない。

口に含むとふわっととけて、何ともいえない香りが広がるアオノリの味は、きっときれいな水と太陽と採った人の思いが、ぎゅっと凝縮された味なんだ。

アオノリ採りはつらい仕事

そもそもアオノリ採りは女性の仕事だったとか。一年で一番寒さが厳しい季節、川に入っての作業はどんなだったのだろう。2月の終わり、小祝地区のお母さんたちにアオノリ採りのお話しをうかがいました。若い頃から家の手伝いでしてきた方、結婚してするようになった方…。今でこそウエットスーツや胴長があるものの、昔は防寒着もないまま川に入って川底のアオノリを摘む。「肩までまくった着物の袖が水に浸かってもうがんこができてなあ」「岸で火にあたっては中に入る。でも、すぐに凍えてねえ」その寒さを想像するだけでもつらい作業だったと察します。そんな寒さしのぎに誰とはなしに歌われたのが「アオノリ取り唄」。ちょっともの悲しいフレーズにジンときました。

お母さんたちの唄に、ほれぼれ!!

ご協力いただいた皆さまに感謝☆小祝地区アオノリ取り唄保存会の皆さま☆小祝地区自治委員 高倉様 小祝地区漁協婦人部の皆さま☆Mr.TANAKA☆Mr.TERAMOTO おはなし楽しかったデス。

青ノリ取り唄（小祝地区の作業唄）

一、なんの因果でヨー　青ノリ取りゅ　なろうたヨー
　寒の師走も　川の中ヨー

二、寒の師走もヨー　日の六月もヨー
　辛い努めも　せにゃならぬヨー

三、浅い川　じゃとヨー　こづまを　からげヨー
　深くなるほど　帯をとくヨー

（以下省略）

焼きそばやタコ焼きにかける「アオノリ」とはくらべものにならないオイシサ♡はんとじゃ。

中津発 ★おいしい青のり料理★

★青のりは食物繊維、カルシウム、ビタミンAが豊富。新陳代謝を活発にするヨードもたっぷり。お肌にもGoodで老化防止にも役立つそうな。

☆昔からのオーソドックスな食べ方☆手でもみほぐしお醤油をかけて、ご飯に。
☆軽くあぶれば（レンジでチンでもOK）簡単に細かくポロポロになるので☆そのままお味噌汁やスープにポイッ☆かき餅を作る時や、天ぷらの衣に混ぜ込むと香りがグー!!☆お好み焼きやチャーハンに入れてもいいし酢ものやサラダにも合います☆出来たてのおにぎりをコロコロところがすと見た目にもきれい。おはぎにもいいね☆少し古くなったら水でもどして 酒、醤油、みりんを1:1:1の割合で加えてぐつぐつ煮ると青のりの佃煮☆
ほかの乾物と同じく、常備しておくと便利です。 by SUZUMISN

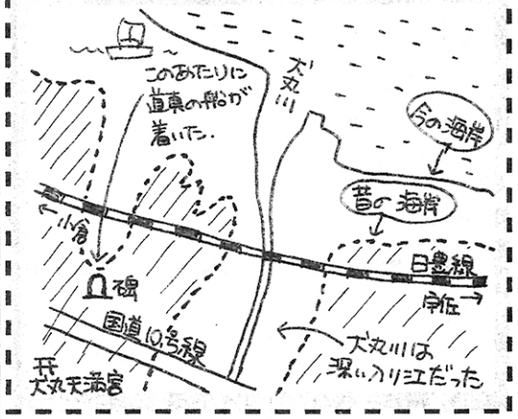
アッシー先生のインスタント地質学

昔の中津の海岸線はどうなってた？

●**今の中津の海岸線**はJR日豊線の北1キロ～1.5キロ付近である。では千年、二千年前の中津の海岸はどうなっていたのか、少し推理してみよう。

●**千年前の中津の海岸**を知る手がかりを探していたところ、国道10号線沿い犬丸に**「菅公着船之跡」**があることに気づいた。菅公というのは、いうまでもなく政争に巻き込まれ大宰府に左遷されたかの菅原道真公である。学問の神様で知られている人である。そうならば彼が船をつけたこのあたりこそまさしく約千年前の海岸線ではないのか。地形図を読むと、現在碑がたっているのは、13.3mの水準点付近であるからして、当時は10m～8mくらいが海岸線だったろうと思われる。道真が船を着けたとされるあたりは入り江になっていたのだろう。現在の海岸よりずっと複雑な地形であったに違いない。

●今回は紙面の都合で、ここまで。**次回は二千年前を**大胆に推理してみよう。（つづく）



おたより紹介

幼少時代、白髪神社の横に住んでいらしたという安倍俊夫さん（63才・横浜市在住）よりお便りが届きました。

初めて海に連れていってもらったのは、まあまあ白いと言える遠浅の浜だった。幼稚園の頃だと思う。潮の引いた浜には沖の方まで幾筋もの川が流れている。夕方潮が満ちてくると、急に深くなったり新しい川が出来たりして帰れなくなる時がある。

「だからトシ坊気をつけて、海から眼を放しちゃいかんで。渡るうっからっちヒョクヒョク沖に行ったらあぶねえ。アシ取られち溺れっしもう。オジイドウ、海ちゅうんは」とにかくトオチャンからは脅かされっぱなし。

夕日を受けて深くなった瀬の流れに、タブタブ揺れて浮かんでる櫓こぎの和船の一艘がある。さっきまで砂の上に聳えるように横たわって動かなかった漁船の一つだ。誰も乗っていない。「トシ坊乗っちみるか」と父は簡単に言うと私をヒョイと抱え上げて揺れる舟の中に入れた。自分はへその上まで流れる海に浸かっている。

これが初めての乗船だと記憶する。なにせ舟が小さかったうえに大揺れに揺れた。多分べそをかいたか、船縁と父の腕とどっちを長く掴んでいたか、いずれにしても父にとっては、あんまり末頼もしくは見えなかったに違いない。

日暮れて巻き上げながらドドツと寄せてザアツと退いていく大波は、退き際の砂泥の表面を一瞬舌のように光らせて、近づくとガバッと噛み付いてて海に引き込むシヤチかなんぞのように思われた。勿論当時は海獣が現実にいるなどとは知らなかったのだが、海は子供が独りできてはいけない所である事を十分に納得して、私は父の背中で帰路についた。

ところがである。海は私をとりこにした。何を隠そう私は立派な登校拒否児童であった。勉強それ自体では閉口するはどに厳しかった母であったが、この時期学校に行けないことで私を少しも責めなかった事に感謝している。

不登校児はその時如何していたか？ 急に腹が痛くなったり、風邪を引いたり、あるいはそんな風になりそうな気がしたりして、学校に行かずに済んだ日でなければ、母親の作ってくれる弁当をもって家を出て、往還に犬の吼える所で脇道にそれる。神社の横に聳えている気持ちのいい楠の大木の下を通って、しばらく行くと海岸に出る。

そこはキレイなハマではない。コンクリートの堤防の外側には、人の頭ほどのごろた石がゴロゴロしている。海草やらゴミやら、何か分からないネバネバした物が一杯ついていた。潮の引いた先に何やら巨大なものが盛りあがっていた。多分、ブイの一種だったのかも知れないが浮遊機雷か、いやむしろ機雷が外れて打ち上げられたんだと思う方が、子供の想像力にマッチした。（次号へ続く）